季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

春号

2003

3,4,5月

◉特集◉

「海の恵み」

―高田のまちに見える海の印象―

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

なぜか、直江津

知の楽しみ

日本一のカラスのまち

フリースペース

直江津の音楽文化◉その2

海の入日・上越市民吹奏楽団

ミニ特集

高田のまちの近代洋風建物

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

直江の津

第九号　春号
二〇〇三―三・四・五

特　集1　「海の恵み」
―高田のまちに見える海の印象―　4
巻頭エッセイ　なぜか、直江津　森　子朗　3
知の楽しみ　日本一のカラスのまち　中村雅彦　12
フリースペース　直江津の音楽文化―その2
海の入り日・上越市民吹奏楽団　箕輪　響　16
ミニ特集　高田のまちの近代洋風建物　10
シリーズ　屋台まち　25
読書びと　タマリンドの木　池澤夏樹著　21
見る目　直江津ゆかりの兄弟画家　28
浜下駄　22
東西海陸　24
読者から・バックナンバー　31

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



岡本銕二作
JR 直江津駅前広場

なぜか、直江津

森　子朗

人間は、自分の生涯を通じて、生まれ育った土地や地名とは別に、精神的に深く思い入れをしている土地や、地名にこだわりをもって生きているのではないだろうか。あの土地に住んでみたい—固有名詞の美しいあの場所で追体験したい—そうした個々の精神的風土にひとしいエリアに帰依する心情的起因は、かなり不条理な論理で形成されているが、いかがなものか。東京から高田に居を移して四十年、なぜ高田より直江津なのかが私の心中にある。幸いなことに高田市、直江津市でなくて上越市だから、まァー市民としての存在理由は問われないが、そうでなければ異邦人タイプの刻印を捺されてしまう。むかし、むかし、上野駅から汽車にゆられ六十近い駅名をそらんじながら、西頸城の海辺の駅に下り立った一人旅は小学生四年の時から始まった。北陸線に乗り換える唯一の駅が直江津、その時間待ちを利用して、浜グミの小枝に服をからまれながら、砂丘についた小径をたどる—とりとめもなく響く海鳴りを心にきざみながら、あァーこれが日本海なんだ。そんな風景を胸内に灼きつけていた。のちに「わけもなくきたかた（北方）の地に降り佇ちて秋の海みる寂しさよ」こんな心情を吐露したこともあった。親不知の険を越え、西浜七谷と称する峻険な西頸城の海辺の道を足した人たちが、岩戸の崎に至ると、にわかに視界は展け、はるか前方に〝米山〟が屹立している。古来、直江の津は人々に希望と安らぎを与えてくれる土地であった。義経記（岩波版）による義経主従北国落ちのくだりに、感情移入すると—直江の津は義経主従にとって、それまでの辛苦もどこへやら、好条件の土地に思えた。出羽羽黒山参詣と称して金品の無体な寄進を地元に求めたのも、その辺の事情がひそんでいたのかも知れない。ここでタイムスリップして恐縮だが、国府小学校の裏手がゆるやかな斜面の松林で、夏は待宵草が花をつけ波打際に直結していた。善光寺浜だって語りつぐすべもない程一変した。それが時代の移り変わりなのサーといってしまえばそれまでだが、自然が景観を変えてしまったのではない事を、我々はキモに銘じておくべきである。直江津は私の人生にかかわりのある土地であるだけに……。

（上越市在住・俳人）

特集

海の恵み

――高田のまちに見える海の印象――



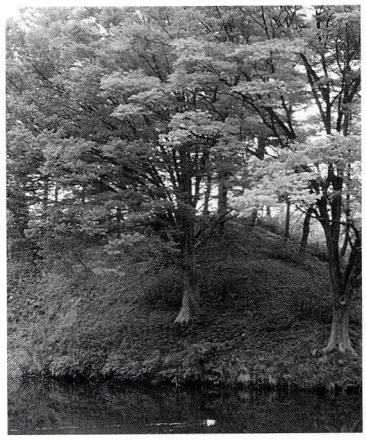
♪格子戸をくぐりぬけ
　見上げる夕焼けの空は…♪

これは、ご存知小柳ルミ子が昭和四六年に歌ったデビュー曲「私の城下町」の歌い出しです。筆者が大学に入った年に発売され非常に想い出深いのですが、故郷が城下町ではない自分にとってはさほど歌詞に愛着のようなものは感じてはいませんでした。それよりも、彼女の昭和二七年七月二日生れであるというプロフィールが印象に強く残っています。実は、筆者と全く同じ生年月日だったからです。

城下町を意識したのは、昭和五二年、当地に就職してしばらくたってからでした。商店街が店じまいする時間の早いのにびっくりしたことがきっかけだったと記憶しています。それから、筆者の城下町散歩が始まり今に至っています。今回は皆さんと一緒に高田の町を歩いてみましょう。







✳私たちの城下町

全国には多くの城下町と呼ばれている町があります。最も近くは糸魚川、姉妹都市米沢も上杉氏の城下町です。しかし、同じ町で城下町が移動して造られていたことがわかるのは、全国的に見ても上越市だけなのです。春日山城から福島城へ、そして高田城へと城が変遷していることから、城下町も移動しながら現在の上越市がつくられてきました。ただ、春日山城下町については、越後府中と春日という問題が解決されていませんので、城下町といってよいか意見のわかれるところですが、ここでは春日と直江津（越後府中）を含めて城下町として考えることとしました。福島城も今では城がどこかすらはっきりしませんが、古城小学校という名がその面影をとどめています。古城小学校は福島城の本丸に建てられているのです。

春日・直江津、春日新田、高田、みんな城下町だったのです。

✳城下町を歩こう

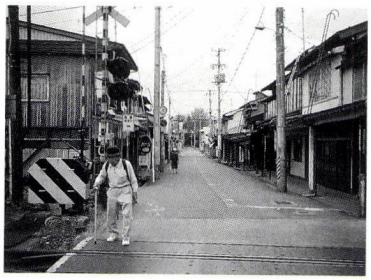
春日山城と福島城は城下町がよくわかりません。四〇〇年前にマチからムラに戻されてしまっていますから無理からぬことで、多くの学者さんがいろんな説を発表しています。

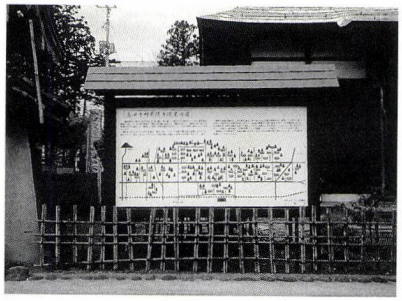
ここでは、よくわかる高田城下町を見てみましょう。

筆者の勝手を言わせてもらえば、このお菓子屋さんの看板が大好きです。「枡形屋」と書かれたこのお店は、高田城への信州からの入り口に造られていた枡形のあった所にあるのです。国道18号線の新設によって南本町から西城町へ新道が造られたことで枡形はなくなってしまいましたが、このお店がその名残をとどめているのです。

寺町も得難い景観を保ってくれています。高田の歴史を記した書物に必ずといってよいほど登場する寺町の作られた意義について、本当なのかなといつも疑問に感じていることがあります。「寺町は、高田城下町の防衛上最も手薄な町の西端に二列に並べて造られました」という記述は、なんともしっくりきません。他の城下町にも寺町はありますし、寺町そのものは城下町に不可欠のものであったにせよ、あれほど整然と並べる必然性は防衛







という視点では解決できないのではないでしょうか。

ちょっと目先をかえてみましょう。

越後府中と福島城は関川を挟んで向かい合っていました。新旧ふたつの町から西を望むと五智の山並み、国分寺や奥の院岩殿山が遥拝できるのです。それらは西の聖地として崇敬された空間だったのではないでしょうか。

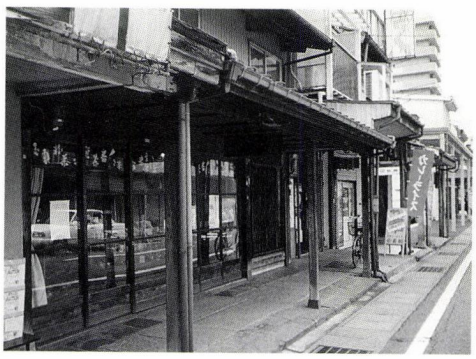
城下町の移動は、ただ町の移動にとどまらず、そこに暮らす民衆の移動に他なりません。高田に城を移した松平忠輝は府中の景観そのものも移したかったのではないかと思えるのです。

✳雁木もいい味を出しています

サンサン通りや五番街ができた頃、いろんな意見がありました。「高田の町を台無しにした。」、「商店街が明るくなってよかった。」どちらの意見が正しいというわけではなく、都市計画をやり直しても雁木を守ってきた高田の人の心が、木が鉄骨になって残っていると思うのは間違いでしょうか。

過去だけにとらわれることなく、現在も見据えていきたいものです。

しかし、総てがそうであればよいわけではないでしょう。高田の道で雁木のないところは、明治以降に造られた道筋です。住民の総意で作られていく雁木には意味を持つかもしれませんが、ことさら高田だから雁木というのもいかがなものかと思っています







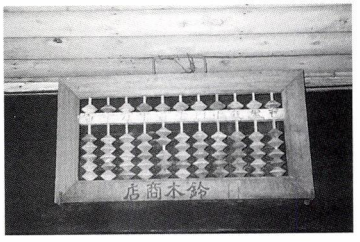


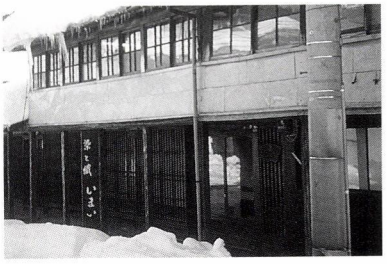














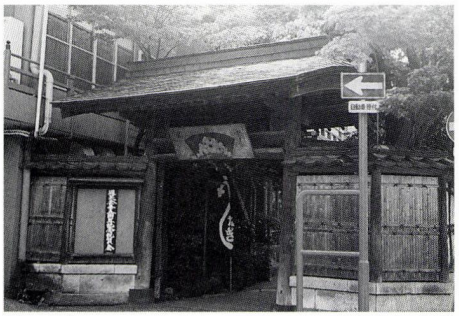
✳看板が教えてくれたもの

高田の町並みでよく目に付いたのは、先にも書きましたが看板でした。「うるし」・「仏壇」などに混じって「蒲鉾」を見つけた時の印象が強烈だったことを憶えています。実は、なんで魚の捕れない高田に蒲鉾を作る工場があるのだろうというのが素直な気持ちでした。この回答はすぐに得られました。「田端町」が四十物（あいもの）の専売権を持っていたからというものでしたが、その時は余り深く考えもせず納得したものでした。

ところで、酒の好きな筆者は若い頃週に一～二回は仲町に通っていました。何で、こんなにたくさんの飲み屋さんがあるんだろう、そんな疑問を感じながらも銚子一本ごとに探求心などどこかにいってしまい、酩酊を繰り返していました。仲町通いが減って疑問が再度頭をよぎるようになってきました。

料亭・魚屋・桶屋、これらが一緒の場所（マチ）にあるのは何でだろうと。









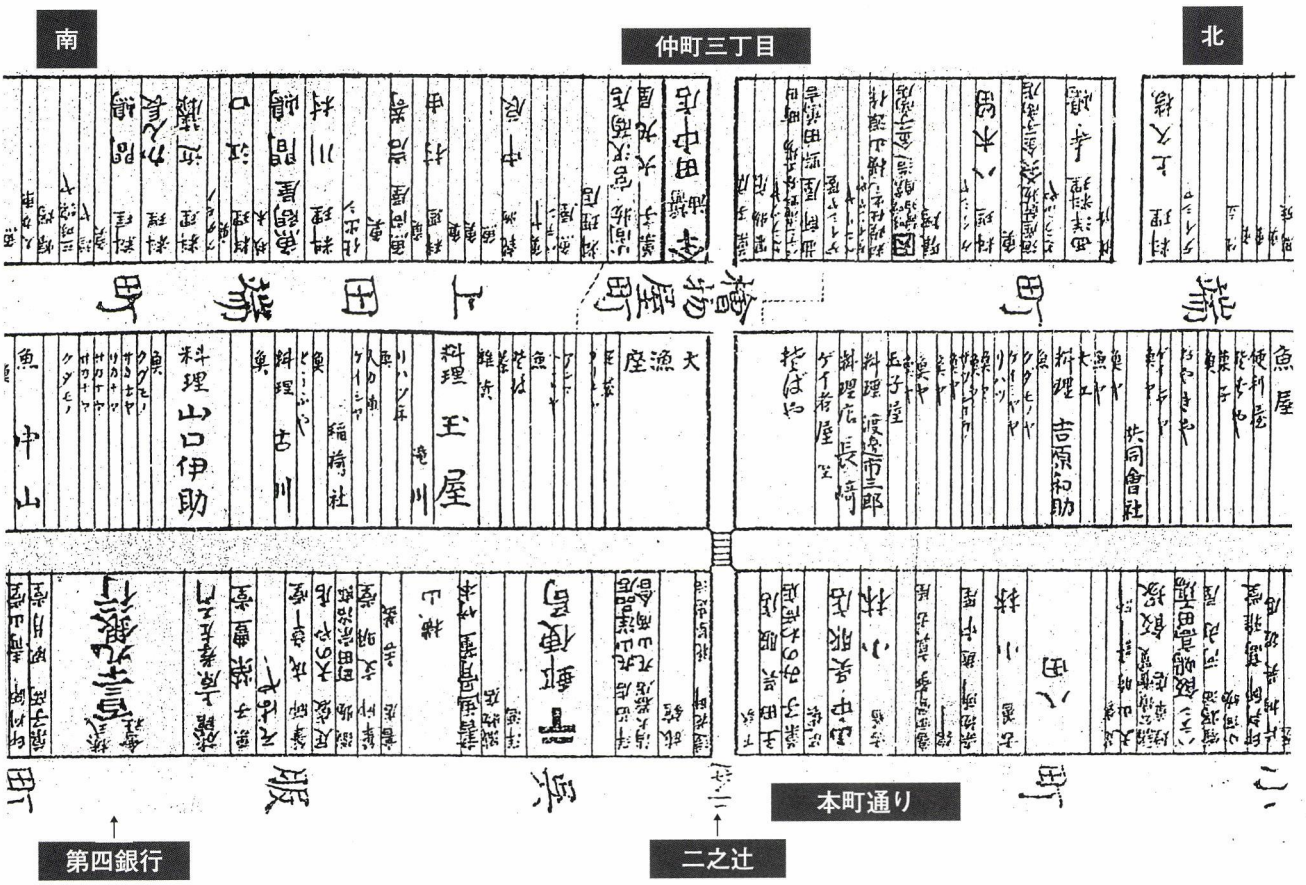


「田端町」は堀氏が福島城を築城した時に城下に作られた町で、松平忠輝の高田築城に伴って高田に移りました。現在の仲町三丁目が田端町に当ります。仲町三丁目町内会には、現在も福島城時代から四十物の専売を認められていた古文書が残されて貴重な町の歴史資料となっています。

では、なぜ桶屋も一緒にあるのでしょうか。桶屋は本来職人町にあるべき商売であるので、四十物問屋が軒を連ねていた町に接して桶屋があるのは違和感があります。しかし、これが本来の姿なのではないかと考えるに至りました。江戸時代は冷蔵機器などなく、魚を保存するには塩蔵することが最も手短で最善の方法であったからなのでしょう。塩蔵にはいくつかの方法がありますが、例えば塩のみで漬け込む方法や米糠と塩で行なうやり方など様々です。前者は「鮭の本漬け」、後者は若狭特産「鯖のへしこ」などです。これらの塩蔵品は、漬け込むときも出荷するときも桶や樽が不可欠なのですから、四十物問屋の周りに桶屋があったとしても何ら不思議はなく、というよりも両者はセットでなければならなかったといえます。仲町四丁目に桶屋町を置いたのは魚の保存や運搬に使う桶や樽を作らせるためだったのです。次頁の地図には桧物屋も記されています。

塩蔵品の名残は今もみることができます。京都の鯖寿司などがそれです。鯖寿司は、若狭湾などで捕れた鯖を塩蔵して京都に送り、京都では塩出しして棒

越後高田町商業地図　明治39年発行



この地図を見ると田端はほとんど魚屋と仕出、料理屋が占めていることがわかる

寿司やバッテラ等に加工するわけです。

その土地では絶対に捕れない物の加工品として、山梨の「煮貝」はその典型といえるでしょう。

✳海の恵み

仲町は、魚問屋を集めて造られた町が本来の姿でした。魚屋は仕出しをはじめます。そして、仕出屋は座敷を開放して料理屋へと変身したと思われます。この変遷を知る手がかりは、魚屋さんの看板を見ればよくわかります。「鮮魚・仕出し・宴会」とかいてありますから。これは仲町だけではないようですが、この町から広がった商売の方法かもしれません。

高田城下町は海岸線から八キロメートルも内陸に入っていることから、冷蔵技術のない時代に鮮魚が豊富だったとは考えにくく、直江津という海に生きた人たちが福島城から高田城下に移り住んだからこそ、上手な魚の加工法が高田に根付くこととなったのでしょう。海の近くで育った人間は生食が原則なのですから、最初に加工ありきではなく、生魚が食生活の基本にあったから加工技術が開発されたといえるのでしょう。

直江津から高田へ、四〇〇年前に町は移動しました。当然人も移動しました。しかし、両者に同じ根っこが見え隠れすると思っているのは筆者だけでしょうか。（本誌・小島）

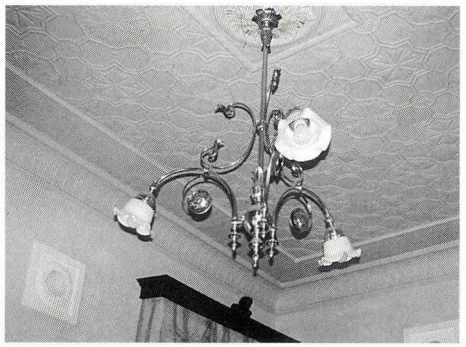
ミニ特集

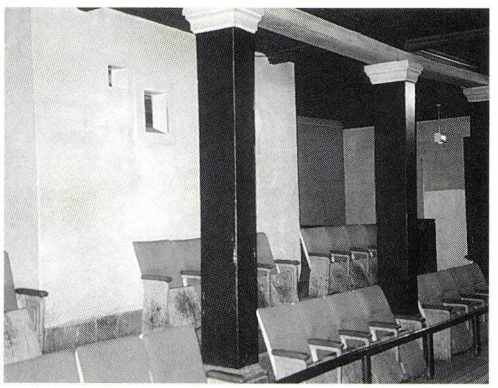
高田のまちの近代洋風建物

高田のまちには数多くの近代建築が今も生きている

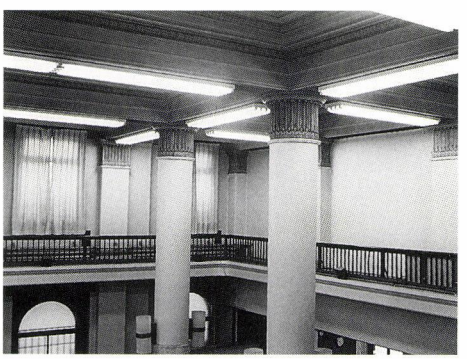


旧師団長官舎（市指定文化財）
明治43年、旧陸軍第十三師団長長岡外史の官舎として建てられたもの。大町2丁目の現在地に移築復元。質実剛健さと華麗さを兼ね備えた洋風木造建築。無料で入館できる。



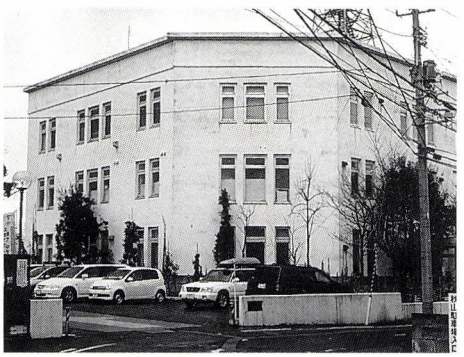


高田日活
明治44年、師団が設置されたのを機に芝居小屋として建てられた。最近は成人向き映画館になっているが、思いでの映画館なっている人も多い。
数年前から本町6・7丁目の地域振興の一環として「景観劇場」と題して、映画や落語などの催し物に積極的に利用され始めている。



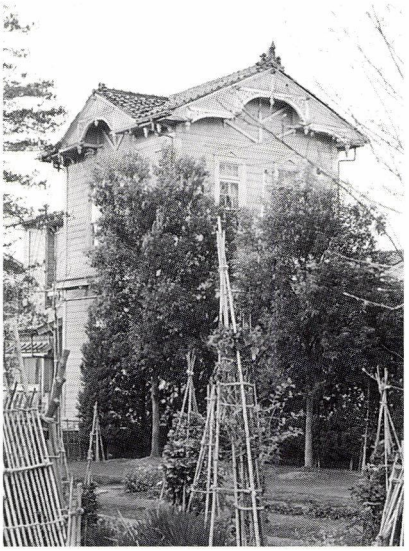
第四銀行高田支店
昭和6年建築の上越では2番目の鉄筋コンクリート建築。もとは第百三十九国立銀行（通称イッサンク銀行）として建てられた。外観はアーケードで遮られているが、内部の吹き抜けにはコリント式の柱が建ち、良好な雰囲気をかもし出している。

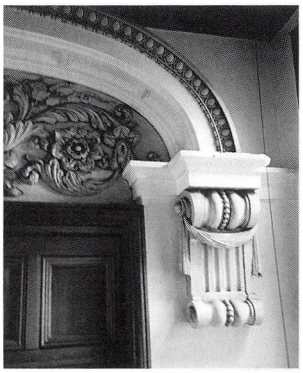
東北電力(株) 高田営業所
中央電気本社屋として昭和2年、上越地方初の鉄筋コンクリート建築として建てられる。内部も大変よく、残しておきたい建物のひとつである。



旧細巾会館（新潟県細巾織物協同組合）

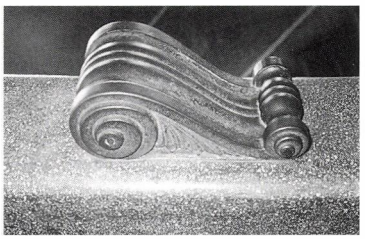
大正２年、知命堂病院初代院長瀬尾原始（瀬尾弦弘は創設者）の邸宅として建てられ、後に上記の事務所に使われていた。大正ロマンあふれる華麗な建物。現存する唯一の民間洋風木造建築。現在、市によって解体保存されている。





大町小学校

昭和４年に16万円余の工費で建設。高田が生んだ稀代の建築家として、関野貞とともに並び称される長野宇平治の手になるものといわれている。校舎内の雰囲気は、最近の鉄筋コンクリートの建築にはない穏やかさが漂い、御真影奉安殿とおぼしき金庫のある部屋が残されているのも奇跡的といえる。老朽化で取り壊されるといわれているが、ゴシック様式の運動場とともに、まちの記憶として残せないものか。









日本聖公会高田降臨教会

昭和13年、ウイリアム・ヴォーリスの設計で建てられた。ヴォーリスは明治38年、滋賀県近江八幡に英語教師として来日。キリスト教の伝導に勤め、社会貢献の一環として数多くの事業を起こしている。そのひとつが、有名なメンソレータム（現メンターム）で知られる近江兄弟社である。県内唯一のヴォーリス建築物。

今回特集したもの以外にも、本町通りの商店などに昭和初期の洋風を意識した装飾を施した建物が数多く見ることができます。
解説の資料は、すべて「歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書」（上越市創造行政研究所）に拠った。

◉知の楽しみ

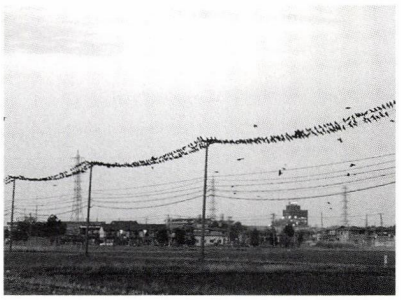
日本一のカラスのまち

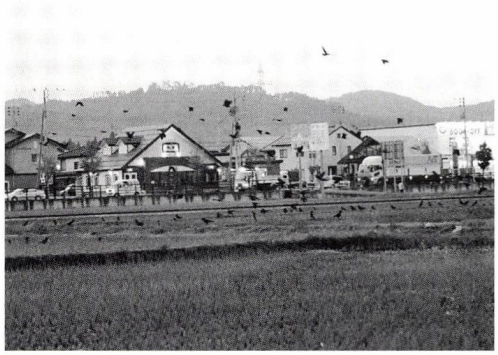
◉中村雅彦（なかむらまさひこ）





上越教育大学のねぐらに集るカラス





カラスは市鳥？

国や県、市を象徴する鳥や植物を一種決めて国鳥、県鳥、市鳥、国の花、県の花、市の花などと呼ぶことがあります。鳥の場合、日本の国鳥はキジ、新潟県の県鳥はトキです。では、上越市の市鳥は何でしょう？　この質問を私が勤務する上越教育大学の学生たちに問いかけたことがあります。答えてもらった学生は大学構内の学生宿舎で暮らす学部二年生です。学生たちは首をひねって「市長の名前なら知っていますが、市鳥ですか？」と言った後、多くの学生が小声で「カラス？」と答えてくれました。上越市の市の花はツバキ、市の木はサクラですが、実は市の鳥は決められていません。けれども、その数の多さから学生たちが思わず上越市の市鳥ではないか、と疑いたくなる鳥がいます。それはカラスです。また、疑いたくなる理由もあります。そ

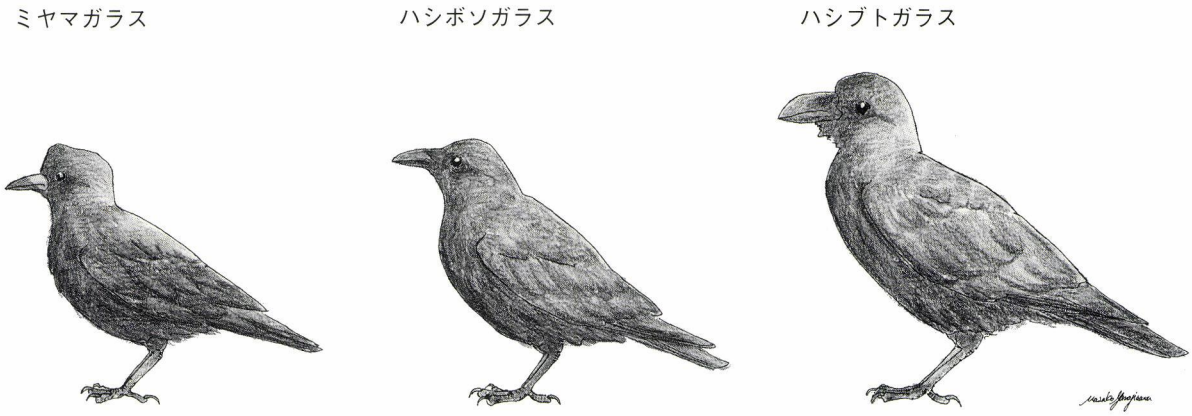


図1 上越で越冬するカラス（イラスト／柳澤雅子）

れは冬になると学生たちは同じ敷地内でたくさんのカラスと一緒に寝ているからです。

集団ねぐら

鳥が夜寝る場所をねぐらと呼びます。上越地域で越冬するカラスの仲間には、ハシボソガラス、ハシブトガラスとミヤマガラスの三種がいます（図1）。三種とも秋から春先にかけて毎日決まった場所に集結し、集団で眠る習性があります。集団で集まって眠る場所を集団ねぐらといい、この集団ねぐらが実は上越教育大学構内の杉林にあるのです。上越地域にはカラスの集団ねぐらがいくつかありますが、最も個体数が多いのは上越教育大学の杉林です。上越のカラスのねぐらは、もともと寺町にあったと地元の野鳥愛好家から聞いていますが、いつ頃から場所を大学に移動したのか詳しいことは知りません。上越教育大学は開学してから二〇年以上経ちます。しかし、開学前にもすでにねぐらはあったそうなので、カラスにとっては大学より歴史のある伝統的な場所であることは間違いないようです。

集団ねぐらを形成する習性は、カラス以外にムクドリ、スズメ、ツバメやハクセキレイなどでも知られています。けれども数の多さや不気味さは、なんといってもカラスが一番です。夕方、山麓線を車で走りながら、上越教育大学に集まるカラスをみて、ヒッチコック監督の「鳥」という映画を思い出す人もいるでしょう。カラスをはじめ集団ねぐらを形成する鳥たちは、主に秋から冬にかけてねぐらを形成します。これらの鳥は、夜は同じ所で一緒に寝るのですが、昼は単独、あるいはつがい、場合によっては群れがそれぞれの生息地に分散して生活しています。カラスの場合も同様で、昼は雄と雌のつがいがなわばりの中で一緒に生活しているのですが、夕方になるとなわばりを離れ、上越教育大学目指して様々な場所から集合してきます。これを毎日繰り返すわけです。

ねぐらの個体数は日本一

私の研究室では定期的に学内の杉林をねぐらとして利用するカラスの個体数と集合範囲を調べています。鳥類の場合、ある種の生息個体数を調べることは一般的に難しいのですが、カラスの場合、複数の学生がねぐらの周辺で待ちかまえ、ねぐらに集まる個体の数をカウンターで数えることによりほぼ正確な生息数を把握できます。学内をねぐらとして利用するカラスの個体数は、九月から徐々に上昇し、一二月に最大になり、春になると減少します（図2）。最大個体数は、一九九〇年に一六、二一〇羽、一九九一年には一二、三二一羽、一九九六年には一三、〇七一羽、一九九八年に一八、〇五四羽、一九九九年には一六、一四〇羽でした。これらのカラスは、南は関山付近、北は頸城村近辺、東は安塚町、西は名立町からも集合することがわかっており、高田平野に生息する多くのカラスが上越教育大学に集合するのです。

カラスのねぐらの最大個体数は、全国でも幾つかの場所で調べられています。たとえば、

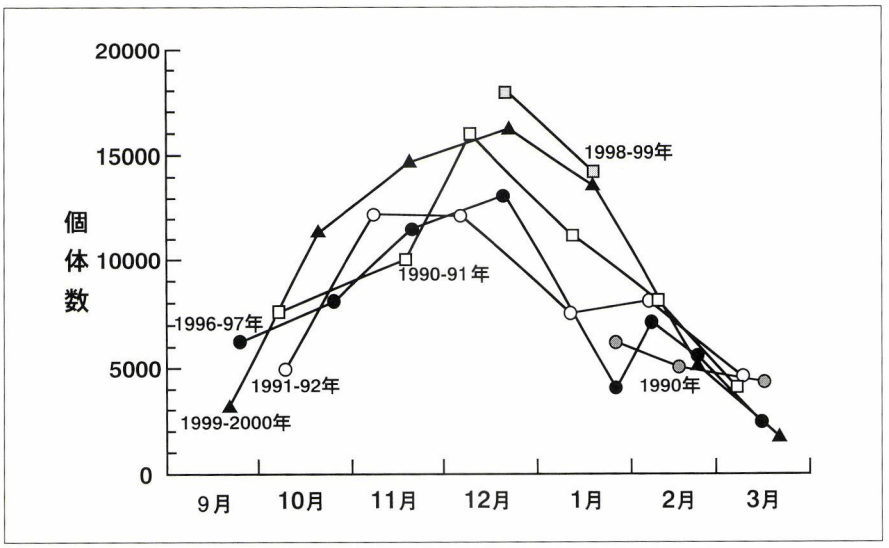


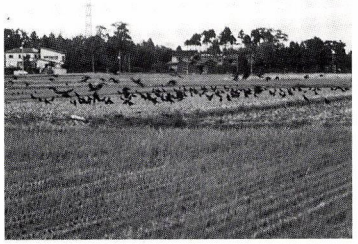
図2 上越教育大学をねぐらとするカラスの個体数の季節変化

千葉県我孫子市高野山で二、〇〇〇羽、上越教育大学の姉妹校である鳴門教育大学にもねぐらがあり、その最大個体数は七、八七〇羽、埼玉県川口市には二、三〇〇羽のねぐらがあります。東京都では、最も大きな明治神宮のねぐらの利用個体数は約九、〇〇〇羽です。最近では、埼玉県新座市に約一万羽のねぐらが形成されるようになりましたが、上越教育大学のねぐらの利用個体数は、日本一なのです。

環境の鏡

カラスは、子猫やハトなどを襲って食べる獰猛な性質を持っています。東京周辺では一九七〇年代の後半からカラスが増え始め、繁華街や住宅地で生ゴミを散らかしたり、繁殖期に人を襲うなどの問題が生じています。こうした問題を起こすのは主にハシブトガラスです。ハシブトガラスは、都市化の進行にともない個体数が増えるので都市化の指標種として扱われています。上越教育大学のねぐらに集まるハシブトガラスの個体数は、調査の時間帯が夕刻のためよくわからないのが実状ですが、集合前に電線にとまる個体をみているとハシボソガラスが数の上では圧倒的です。ハシボソガラスは田舎のカラスでハシブトガラスに比べ穏やかな性質です。ここ数年は、冬鳥として渡来し、日本では繁殖しないミヤマガラスの個体数が増えている印象を持っています。

カラスはどの種も雑食性で、自然界の掃除屋の役割を担い、餌となる生ゴミが増えると個体数は増えます。また、スズメやツバメといった私たちの身近に生息する鳥たちの最大の天敵でもあります。高田や直江津の市街地で繁殖するツバメの最大の天敵はカラスです。カラスは雁木の梁に逆さまにとまって、ちょうど食べ頃の大きさになった雛を丸飲みします。カラスを襲う天敵には、タカの仲間やフクロウがいますが、その個体数は少なく、生態系の頂点に立つのは実質的にはカラスです。従って、カラスの個体数の増加は環境変化の指標だけでなく、他の鳥の個体数にも強い影響を及ぼします。上越教育大学をねぐらとするカラスの個体数は、今後増えるのでしょうか？カラスの個体数の変化は、私たちの身の回りの環境を反映し、上越市の現在、そして未来の環境を映し出すひとつの鏡といえます。



プロフィール
昭和三三年九月四日生（長野県駒ヶ根市出身）
大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程単位取得退学／理学博士
上越教育大学助教授（自然系理科）
主に鳥類を対象とした行動生態学

フリースペース

直江津の音楽文化――その2

海の入り日・上越市民吹奏楽団

箕輪　響　みのわひびき

海の入り日

海に日の入るとき
ひとはふるさとのことを思い出す

これは上越市の作詩家、杉みき子氏の詩の一節である。直江津をふるさととするものにとって、海は最も忘れられない情景である。特に、直江津を遠く離れて生活しているものにとって、海、浜辺は最もノスタルジアを感じさせる。

家が浜辺に近かったせいもあり、海を見ない日はないくらい、海は日々の生活に密着していた。家の中でも一日中波の音が聞こえた。春の波は静かで優しかった。まるで小川のようだった。毎晩波音を子守唄にして眠った。嵐の夜の波音は恐ろしいくらいの音量で鳴り響いた。早朝海にあがる地曳き網に群がり、小魚をもらって食した。夏は毎日海水浴、真っ黒になり、暑い砂浜をぴょんぴょん跳ねながら浜辺まで走った。

高校時代は浜辺での音楽授業、そして一番印象に強く残るのは「夕日」の輝きである。静かな水平線に、真っ赤な日が沈む。徐々に水平線の彼方に入る時、異常なほど大きく形を変え、最後は一層輝きを残して消えていく。名残りを惜しむかのように強く訴えかけてくる。赤い半円形が無くなってもしばらくは明るい。すっかり消え、しばらくしてから夜の闇が訪れるのである。この十数分の間、小高い砂浜に座ってひとりで見つめていた。この瞬間が妙になつかしく、東京生活が長く、しばらくぶりにふるさとに帰る時は、夕日が沈む時間に間に合わせるように車を走らせたものである。家に着く前にまず浜辺に行き、夕日が沈むのを見てから家に向かったものである。（海辺、海岸より浜辺のニュアンスがぴったりする）

これだけ印象深い情景を美しい詩にしてくれた杉みき子氏は「かくまきの歌」「小さな雪の町の風景」など多くの児童文学作品を発表し、また新聞や雑誌の詩壇や詩評などで、誰でもご存知と思う。

この「海の入り日」を直江津出身の作曲家、竹田由彦氏が作曲したのが、この曲である。3曲からなる音楽組曲「海鳥」（第1曲「燈台へ行く道」第2曲「海の入り日」第3曲「祈り」）の2曲目がこの曲である。曲の冒頭の部分だけだが、楽譜で作品をじっくり味わっていただきたい。バリトン・ソロとピアノのために書かれており、まさに直江津の浜辺での私の想いそのままを歌った傑作である。最後にこの詩、全文を味わっていただきたい。

海に日の入るとき
ひとは　ふるさとのことを思い出す
金色の波の下
いつかこころに沈んだまま
地上のどこにもないふるさとを

海に日の入るとき
ひとは　遠い日のことを思い出す
風のうた　白い貝がら
どこかに消えた小さな帆
夢にだけみる　遠いむかしを

海に日の入るとき
ひとはきょうのいのちを思い出す
鳥のさけび　波のかがやき
どこかで呼んでいるなつかしい声
入り日がつれてゆく　きょうのいのちを

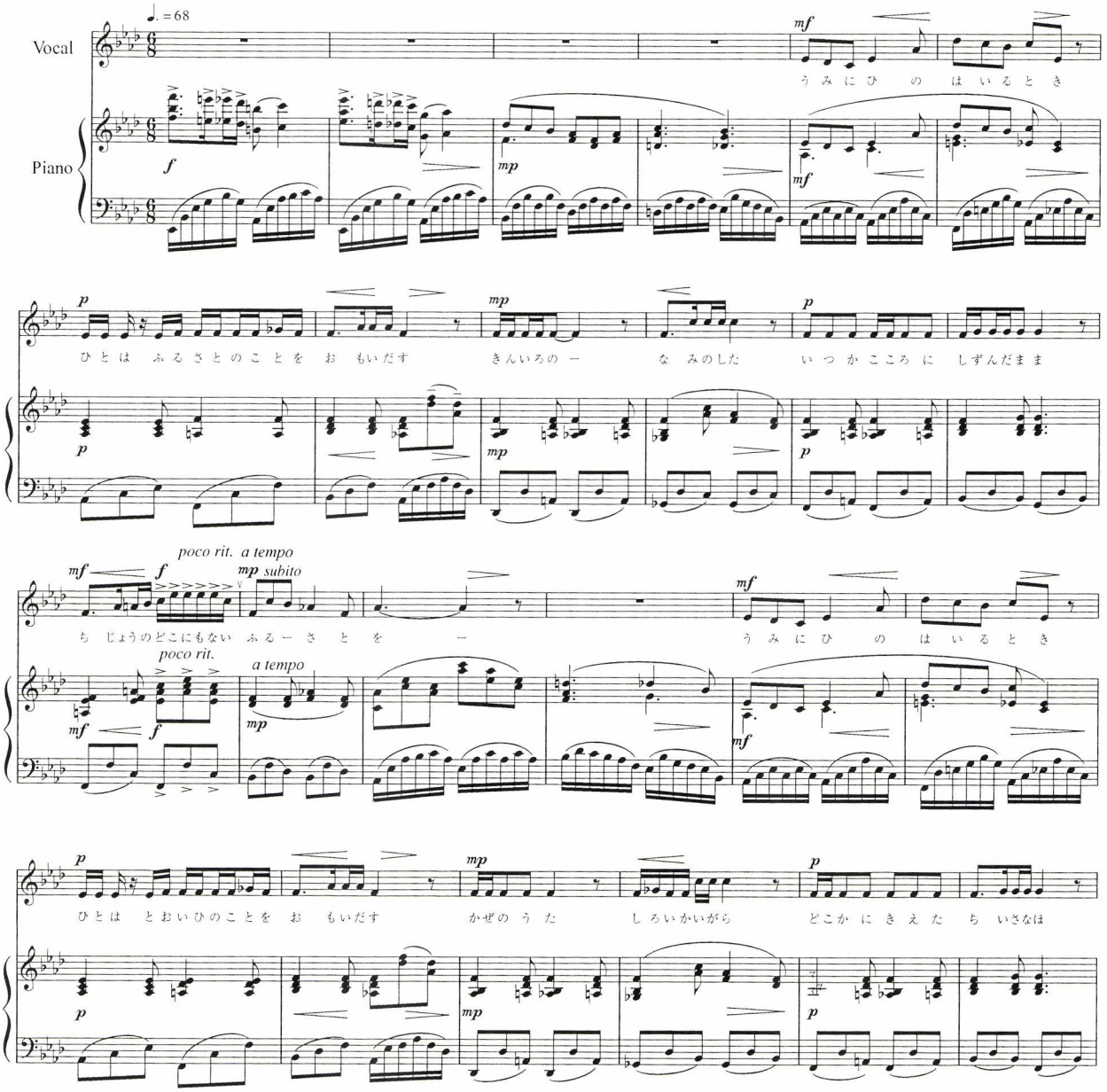


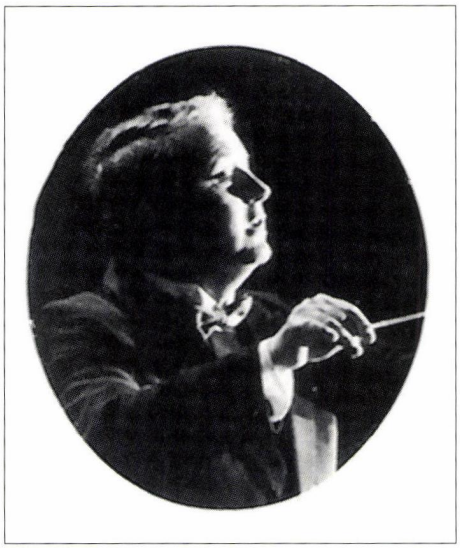


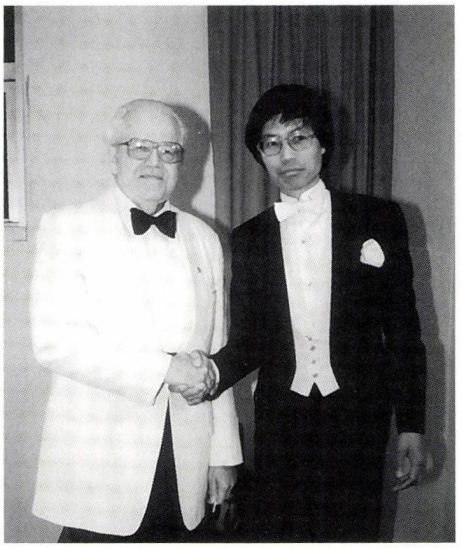
左作詩者　杉みき子さん
右作曲者　竹田由彦氏

海の入り日

杉みき子　作詩
竹田由彦　作曲







右 アルフレッド・リード氏と筆者
左 ジュイムズ・バーンズ氏

上越市民吹奏楽団の歩み

私が音楽の道を志し、管楽器を専攻した昭和三十年代後半は、音楽といえば歌かピアノで、ラッパを吹いているというと「チンドン屋」にでもなるのかと言われた。音楽などは男のやるものではないという時代だった。今ではどこの中学校や高校にもある「吹奏楽クラブ」は直江津中学校、直江津高校には存在していなかった。私は当時、大学受験のために毎日ひとりで誰もいない音楽室でラッパを吹いていた。

大学を卒業し、しばらくしてから上越地域の吹奏楽活動を耳にした。新井中学校が、糸魚川中学校が関東大会を突破して全国大会で素晴らしい演奏をしているのである。全国各地で吹奏楽を指導していた私にとって、ふるさとの活躍を陰ながら応援していた。その後「上越地区吹奏楽コンクール」の審査員として上越に何度も足を運ぶようになった。なんと直江津中学校にも直江津高校にも吹奏楽部があり、立派な成果を上げていた。全国的には中学校や高校で経験した吹奏楽部のOB、OGたちが中心になり、市民バンド活動が盛んになっていた。上越地区でも新井市や糸魚川市が立派な市民バンド活動を続けていたが、上越市にはあまり育っていなかった。

昭和五十七年秋、直江津中学校の音楽教師、豊田教諭と合唱指導していた竹田栄作氏（前上越市民吹奏楽団団長）と三人で、新町の柿村書店の二階の喫茶店で吹奏楽団創設の話し合いを持った。当時私は山形県蔵王キャンプの卒業生を中心に質の高い吹奏楽団を結成しており、その名称もZAO（蔵王アカデミックオーケストラ）とごろ合わせで考え出した。それではとNAO（直江津アカデミックオーケストラ）だと即座に決まった。その後、直江津だけでなく、高田で活動していた楽団と一緒になり、現在の上越市民吹奏楽団として再発足した。

昭和五十九年五月六日、上越市南厚生会館で第一回の定期演奏会を開催した。指揮には牧田悠氏、桜沢邦美氏（故人）、長沢文夫氏を迎え、指揮者には恵まれた楽団であった。

昭和六十一年五月三日、アメリカ吹奏楽界の巨匠アルフレッド・リード氏を迎え、特別演奏会を開催した。昭和六十二年（第五回定期演奏会）にはアメリカ吹奏楽界の寵児ジェイムズ・バーンズ氏を迎え、その後も二度、計三回も定期演奏会にお呼びできた。日本では今でこそ多くの吹奏楽団が外国の指揮者や作曲者を呼んで演奏会を開催しているが、この時期にアメリカで最高の作曲者を二人もお呼びできたのは、この上越をおいて他にはない。海外だけでなく、直江津高校出身の指揮者汐澤安彦氏を始め、指揮者の天沼裕子氏、サックスの小串俊寿氏などをゲストに迎え、力をつけてきたのである。私が常任指揮者をしている、愛知県の尾西市民ウィンドオーケストラとも姉妹バンドを結び、何度も行き来して交流してきた。私は米沢吹奏楽愛好会の指揮者をも務めていたが、米沢とは既に上杉謙信の関係で姉妹関係にあり、これはと思って市役所に通ったが、交流には至らなかった。

平成十四年六月、上越市と姉妹都市であるオーストリアのリリエンフェルトで行われた



リリエンフェルト修道院での演奏

音楽祭に訪欧し、初めての海外演奏を行った。木浦正幸市長、小林章吾市議会議長の先導の下、三十五名のメンバーのリリエンフェルトでの演奏は歴史に残る瞬間であった。姉妹バンドである愛知県の尾西市からも三人の奏者が駆けつけてくれた。四面を石の壁で囲まれた最高の音響を有するリリエンフェルトの修道院の中庭で、櫓太鼓の活躍する日本民謡など日本の調べを奏でた。上越市民吹奏楽団はヨーロッパの地で力強く演奏し、絶大な印象をかの地に残した。そして同年十一月三日、二十周年記念演奏会と祝賀会が盛大に行われたのである。

多くの先人たちの努力によって生まれ、育った質の高い音楽文化は確実に現在の若者達に受け継がれている。そして今後もますます発展していくことであろう。その発展を、期待を持って見守りたいものである。

プロフィール
直江津高校卒業。東京芸術大学卒業。指揮を山田一男、汐澤安彦各氏に師事。山形北高校音楽科、宮城教育大学、名古屋芸術大学、尚美学園の講師を歴任。現在、上越市民吹奏楽団音楽監督



海図を持たない旅人たち
コマルサン３号（2,470t）
朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）籍
2003年３月２日撮す

投稿

「上越タイムス」紙の前身「上越新聞」のコラム「遊報」のコピーがある。

七〇歳になる女性が、昭和四四年一月一九日付「毎日グラフ」を二〇年間、大切にしまっていた話から始まるのだが、そのなかに「黒字市政五五年目の曲がり角」というタイトルで、「ここ五五年間黒字財政を続けている。それは同時に――なにもしない政治だ――という批判もある。雪の多い地方都市の苦しい財政事情を物語る。いま戦国ブームにのって観光地としても脚光を浴びているが……日本の典型的な地方自治体の財政問題とその表情を追ってみよう」という前書から始まる特集がある。この特集ルポの自治体とは旧高田市のことである。NHKの大河ドラマ「天と地と」の放映で、石坂・謙信に沸きかえっていた年でもある（毛糸の帽子を被って登校する北城高校生の姿など、写真も多数掲載されている）。

大河ドラマブームにある高田市が、春日山の城下町であったというのは、当時としてはやむを得ないとしても、「毎日グラフ」が何故の八ページにもわたる特集だったのか。

ライターは、――上杉謙信以来、とくに徳川時代は上越の中心的城下町であり、これほど豊かな歴史を持った都市はそうざらにはないだろう、産業らしきものはないが、上越地方の中心であるという自負が、今の高田市の姿を物語っている――と、まず歴史から解き明かし、一家の家計でさえ五五年も黒字が続くのは珍しいのに、高田市が続いているのは「何もしなかったからですよ」と当時の社会党議員に言わせ、市道舗装の陳情書に「地元負担金も積み立てているので、早急に舗装願いたい」と書かれている例を紹介し、――なんとけなげな市民。なんとうるわしき市を思う心であろうか――と皮肉まじりに書いている。しかし、細かく取材しているにもかかわらず、結局何を特集したのかよく分からない。

先の「遊報」子は、「自主財源豊かな直江津に結婚を申し込んだが、どうもきらわれているようだ」というライターの言葉を引用しながら、――この特集の二年後、古い歴史を鼻にかけて持参金もろくにない年増女がどうやって直江津を口説いたのか。昭和の落とし子上越市はやがて二〇歳になる――。と結んでいる。「年増女」という表現は、ちょっと惨（むご）いと思うが、それなら直江津は何者なのか。

その上越市が発足して満三二年になる。夫婦ならば、子どもも独立して孫もできた。これから自分たちの人生を……、というところであろうか。

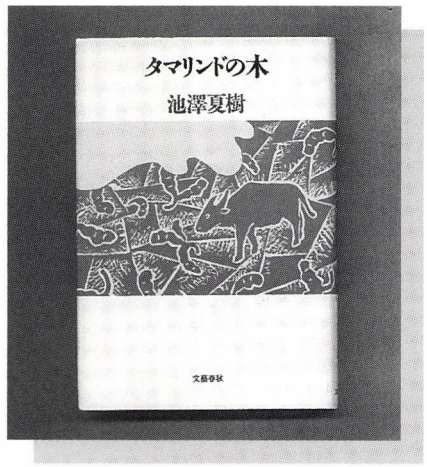
私たちは、「遊報」子がいう、上越市の誕生は昭和の「落とし子」だったのか、「申し子」だったのか、検証を試みたことがあっただろうか。合併にあたって、議会のリコール運動にまで発展し、推進派が戦った反対派とは、臨海工業地帯の労組を中心とする人たちだったという事実など、検証があったのだろうか。三二年間に作りあげた「まちのかたち」とは何か、そして「これが私たちの上越市です」と言える何かを検証してきただろうか。

当時、高度経済成長のまっただなかにあって、合併推進派が掲げる「共に食べるパイ（あるいは餌場が）は大きいほどいい」という論理を今さら否定できるものではないが、筆者も持っている「毎日グラフ」を読み直しながら、それらの検証作業を怠って来たのではないかと思った。

「グラフ」を大切に持っていた女性も、ご健在なら百歳を超えていらっしゃるはずである。

（匿名）

■読書びと



タマリンドの木

池澤夏樹著

文藝春秋刊
（現在は文春文庫）

この号が読者の手元に届くころ、中東で戦端が開かれているかは神のみぞ知る。

池澤夏樹は、二〇〇一年九月十一日の二週間後に始めた日刊メール・マガジンでアフガンをめぐる作家個人の意見を世に問い続けた。昨年三月に刊行された『新世紀へようこそ』（光文社・一四〇〇円）は初期二か月分の五一本のコラムと寄せられた多くの返信、そして返信にたいする池澤のコメントが纏められている。

「テロは『絶対悪』だから」、「そこには相対化できる主義も倫理も価値もない」という論法への違和感を〈誤爆〉に倒れた無辜の市民の生命、の一点で拘りぬき、メールで寄せられた様々な考えとの応酬を経て反論の骨格を作り上げていく過程が胸を打つ。

そして本年一月、「もしも戦争になった時、どういう人々の上に爆弾が降るのか、そこが知りたかった」とその国を旅して『イラクの小さな橋を渡って』（光文社・九五二円）が出版された。『ナジャの村』で土門拳賞を受けた本橋成一による、子供や市井の人々の写真で飾られた本文僅か八十頁の本。ニューヨーク・タイムズが世界貿易センタービルの被害者一人一人の人生を詳しく辿る記事を載せた、その反対極として池澤はバクダッドの市場からユーフラテスの川辺の村までを歩き回り、町の食堂で糧をとり、無邪気な少年たちと一緒に歌った。それがこの作家の、優しく明晰な新世紀の生き方なのだ。

池澤夏樹は一九四〇年北海道帯広市に生まれ東京で育つ。埼玉大学理工学部を中退、七五年より三年間ギリシャに滞在した。詩人としての活動ののち八八年に『スティル・ライフ』でA賞を受賞する。理系の感性と北方から南島に至る度々の旅の中から、多くの小説と、文明論としてのエッセイ・評論、映画時評、書評集、翻訳を同時代の私たちに手渡し続けている。

一九九一年に上梓された『タマリンドの木』は池澤ワールドの中では稀な恋愛小説である。

船舶用大型機が専門のエンジニアの男、その部屋には家具は少なく、本とレコードは沢山あり、自炊でうまい料理を作り、休日は同僚と小型風力発電の実験をする。タイとカンボジアの国境にある難民キャンプで保母をしている女、彼女は旅行者として訪れたタイに惹かれて移り住み、使命としてではなく日々生きる充足感のために、NGOの組織に場を見いだしている。男と女の東京での邂逅。男が「お互いの判断を認め合い、苦難を前に二人で困惑し、解決し、生きてゆく。日本の安楽が与えてくれないものをそういう形で獲得する。この二人にしかできないことだから、それをやってみる。」という愛のかたちを選び、女の下へ、タマリンドの木を囲むキャンプへ旅立つまでのモノローグが、リリカルな筆致をもって紡ぎ出される。

シンプルな手法で書かれたこの珠玉の中篇に込めた想いに、彼の原点を見る。

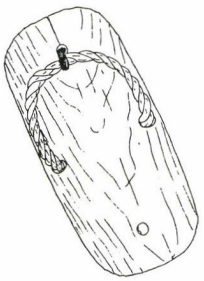
池澤夏樹は、『草の花』『風土』『忘却の河』等の硬質な倫理と抒情に裏付けられた小説を私たちに遺した福永武彦の忘れ形見である。隠士として生き、シベリウスと、ゴーギャンのタヒチを終生夢見た父親の心象風景を受け止め、愛を試みながら常に逡巡する男を書き続けた福永の小説世界を、いま描き直すその軌跡。

ヒマラヤ奥地に展開する『すばらしい新世界』やアイヌ民族を主題にした『静かな大地』等の近作を見ても、この作家が自然と文明の重なりを凝視し、言葉の力を畏れつつ信頼することにより、天の恩寵に恵まれていると感ずる。

池澤は九四年より沖縄に移り住んだ。我が島尾敏雄と同じく、すべてを撃つ力の根源は南島にあるのか。大好きな海と、家族と仲間に囲まれて、好漢のさらなる健闘を祈りたい。

（震）

「浜下駄」





ハ・マ・ゲ・タ

もう死語と言ってもいいかも知れない。

『日本民俗大辞典』によれば、新潟県の中越地方から富山県東部の海浜地域で使用された砂浜歩行用の下駄。歯のない幅広の台部を特徴とする。鼻緒が前後反転できるよう台部に四孔が穿たれた前後交換式と胸削ぎのポックリ式がある。前者は柏崎から上越市にかけて使用され、台は杉か桐で鼻緒はシュロまたは藁、後者は糸魚川市から魚津市にかけて使用され、杉台に藁の鼻緒をすげる、とある。

渡邉三四一氏（柏崎市立博物館）は、同館の研究紀要で、近世の紀行文などの史料から詳しく報告しているが、なかでも面白いのは、『金草鞋（かねのわらじ）』で十返舎一九が見た光景である。同著は、一九が高橋孫左衛門家で逗留し、「濡れ手にあわの…」と「粟あめ」を紹介していることでよく知られているが、さすがに一九、面白いところを見ている。主人公が、柿崎から片町宿（潟町）に着き、このあたりは砂路なので、

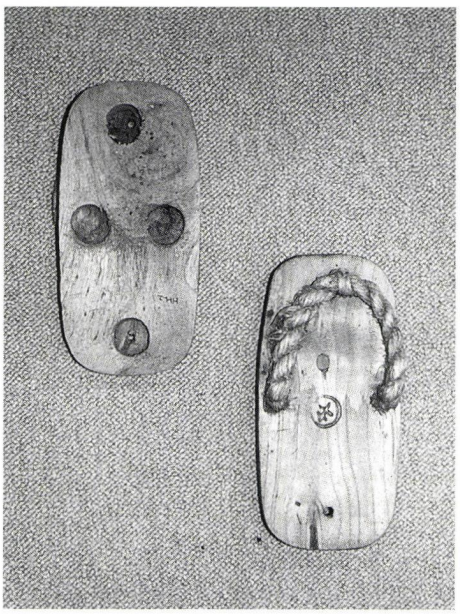
　このあたりの人、歯のなき下駄を穿きて歩行く

と言い、黒井宿では、

　このあたりの駕籠舁き、みな歯のなき下駄を穿いている。息杖するとき、その穿いている下駄をちょいとぬきて、その下駄の上へ息杖する。その塩梅はなはだ面白し。

と言わせている。

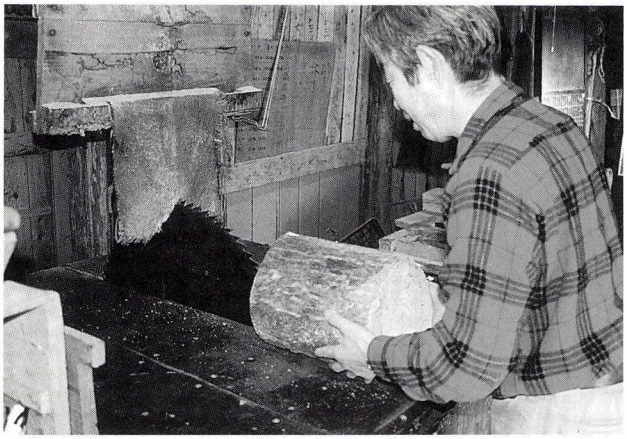
浜下駄は、かつて浜仕事の履物として欠かせない必需品であった。歯が無

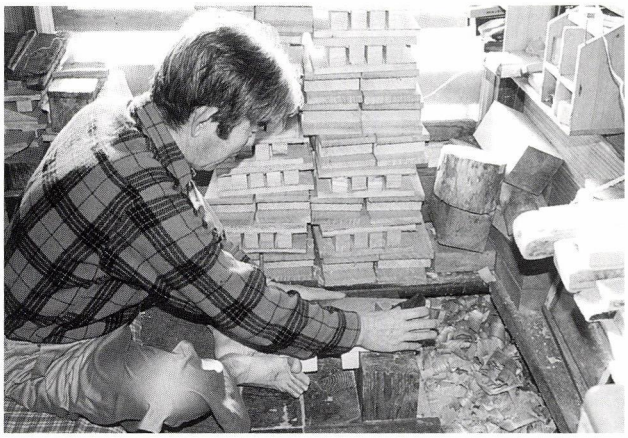


「浜下駄」上越市立水族博物館蔵



井上満治作「浜下駄」





作業中の井上さん

いのは、砂に歯が埋まらないためであり、横緒が台の中央にあるのは、歩くと踵が上がって砂が残らず、歩きやすいということである。踵にも鼻緒の穴があいているのは、引きずって歩くため踵が減りやすく、減ったら前後を挿げ替えることができるようにした先人の知恵である。

ぽっくり形との機能的考察はおいて、この浜下駄を今も作っている人がいる。

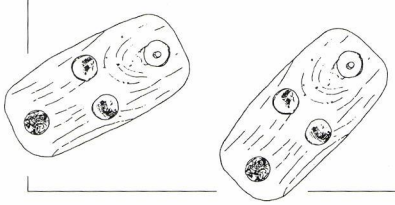
柿崎町の井上はきもの店、井上満治さんである。井上さんの作る浜下駄は、先代のころから多少の変更が加えられ、従来型ではなく、横緒の穴が溝形になって、緒の両端を結ぶようにしている。（写真）井上さんの話では「改良というより、藁の鼻緒が作れなくなってしまったせい」だという。

それにしても、まだ浜下駄の需要があるのだろうか。

井上さんは、「最近、信州の人が、珍しがってわざわざ買いにきてくれましたよ」と言う。まちなかで履いて、意表を突こうということらしい。歯がないということは、苔庭などを歩くには意外にいいかもしれない。

後継者がいらっしゃらない由、残念だが、できるだけ技術を伝えていっていただきたいものである。

資料／柏崎市立博物館研究紀要4号
イラスト／同書より転載



海西 東陸



『東都歳事記』より隅田川堤の花見風景

松本の街を歩いていて、運が開けそうな名前の菓子店に、桜餅が売り出されているのを見つけた。

うぐいす餅に始まって時季のお菓子は、一応食べないと気がすまない筆者としては、どうしても買わざるを得ない。

ふと見ると、「今日は関西風です」と札が出ている。聞くと、関東風の日が週に三日、関西風の日が二日と、曜日によって違うのだという。

筆者にとって桜餅といえば、つぶつぶの餅で餡を包んであるものなのだが、この店の説明書きには「さくら餅にも関東風と関西風があって、信州は概ね関東風で、小麦粉の薄皮で餡を包むものです。関西風は道明寺種で餡を包みます」とある。なるほど、筆者の食べていたものは「関西風」であったかと感心しつつ、良かったと思ったものである。

「良かった」と思ったのは、関東風のあれを桜餅だとは思っていなかったからである。

ところで上越はどうなのだろうか。筆者の知る限りでは「つぶつぶ」である。

インターネット上で、市内の某菓子屋さんは「ある時期までは、ほとんど関東風だった」と言っている。ならばいつ関西風になったのだろうか？　その理由は？……

桜餅は、江戸向島長命寺門前の山本新六という人が、小麦粉の薄皮で餡を包み、塩漬けにした隅田堤の桜の葉で巻いて売り出したのが、発祥だということである。

東京（関東？）で「長命寺」といえば、いつしか桜餅の代名詞となって、道明寺粉の桜餅には、わざわざ「道明寺」と但し書きが付いているという。関西は多分「椿餅」の変形ではないかと思うのだが、それならいつ桜の葉になったのだろうか。

桜の葉っぱは、オオシマザクラという種類で、ほとんどが伊豆産という。この葉っぱにはクマリンという成分があって、塩漬けにして発酵させると、あのなんともいえない芳香を発散する。

三つ食えば葉三片や桜餅　高濱虚子

この句をみると、餅ひとつに葉一枚だということがわかるが、筆者が買ったものは、上下に二枚の葉で包んである。長命寺は、雑誌などの写真を見ると、二枚だったり、一枚二つ折りだったりしている。

さて、この皮（葉）は餅といっしょに食べていいのか、剥いで食べるものなのか。

長命寺桜餅では、この質問があまりにも多いので、小沢昭一さんが教えてくれた小話を紹介しているという。

皮（葉）をつけたままで食べているお客に、別のお客が

「カワヲムイテタベタホウガオイシイデスヨ」（カタカナ筆者）

と言うと、それを聞いた客が、くるっと背を向けて、大川の方を向いて食べはじめました。

（河）

＊本来、小麦粉は饂飩粉、道明寺粉は道明寺糒（ほしい）というのが正しいらしい。



屋台まち

「直江津」とはなにか？
現在、祇園祭に屋台を出す町名の元になったのは、昭和27年の町内統合にあります。後に、祇園祭の神輿が巡幸しない町内も屋台を出すようになり、今のような19町になりました。祇園祭に屋台を出さなければ「直江津」じゃないのか？　という反論を覚悟で、屋台を通して町内を訪ねることによって「直江津」が読み取れるのではないか、という大胆な仮説(？)のもとに取材してみました。
次回から春日新田も登場（取材・江塚）

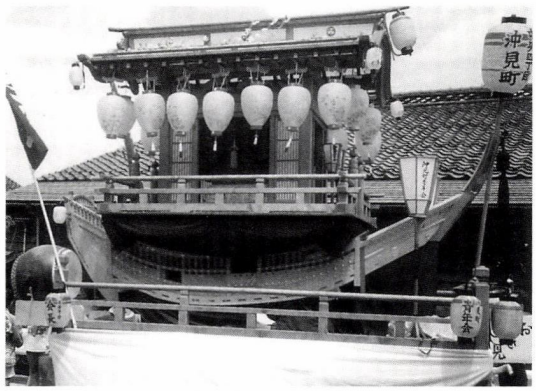
沖見町
おきみちょう

旧坂井区、船見区、本砂山区からなる町内で、この辺りから急に坂が多くなり、町割りも複雑になります。荒川町や天王町の町並みとは明らかに違った風景が見て取れ、旧町名でも知れるように砂丘の上にできたまちということが分かります。

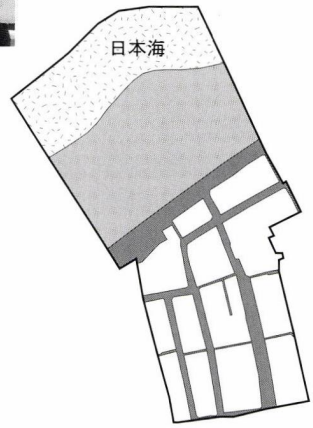
3つの町内はいずれも屋台を持っていましたが、昭和26年に坂井区の青年会が造った最も新しいのものが使われています。（本砂山区の上モノは東雲町に譲り、船と車が付けられたとのこと）

屋台が作られた昭和26年当時は、町内の子どもも多く、屋台を引く綱の長さが100m程もあったといいます。

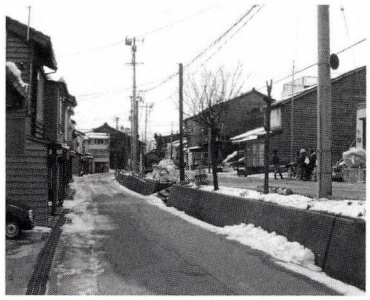
沖見町にはたくさんの井戸がありました。古い絵図を見ると川に近い荒川町や本町周辺では各町内に1、2本程度ですが、旧沖見町は、町内にそれぞれ3本ずつ井戸がありましたが、現在どの井戸も埋めてしまい、使用されているものはありません。



沖見町の屋台



●まちのめじるし●



段違いの通り

砂丘の斜面に立つまちの特徴がよく現れています。昔はここで運動会が催され、綱引きやとび競争をやつたといいますが、いったいどうような光景だったのか？　想像するだけでも楽しくなります。一町内で運動会を開催できるほど、子どもがいたわけですが、昭和20年代、直江津小学校は1クラス60～70人で8～12クラスもあったというのだから驚きます。「教室が子供で満杯だった」とか。

屋号

旧坂井区の屋号を見ると、「サブロウサ」など、「～サ」という名前が多いことに気付きます。これは直江津全域における特徴なのでしょうか？



林覚寺の大屋根

●まちのめじるし●

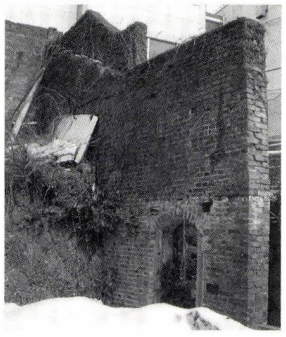
本町・横町

ほんちょう　よこまち

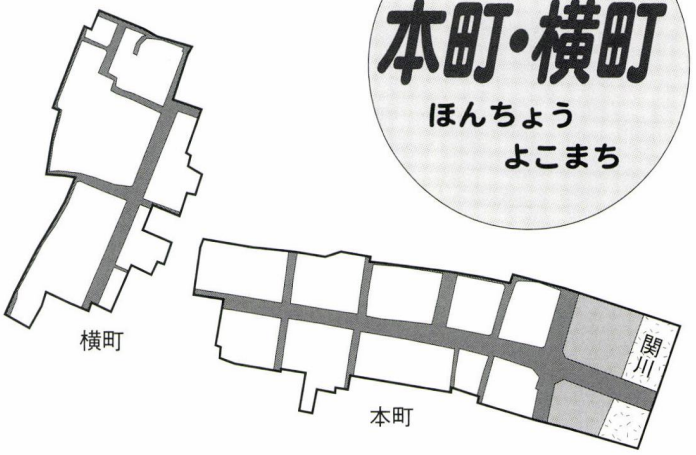


道路元標





レンガ屏の石段





本町の山車

猿田彦命の像
五智の滝川美堂作で、京都西陣織の衣装を纏っている。

本町は旧新区、新橋区からなり、かつての直江津のメインストリートで、今町の大肝煎福永家の跡地に直江津郵便局が建ち、銀行も多く、現在の高達回漕店（天王町）は大正６年頃までは直江津銀行の建物としてこの通りに建っていました。ほとんどが商店で構成されており、業種も多様で、今では想像もつかないほどの賑わいをみせていました。屋台からもその特徴がうかがえます。

屋台は大正15年の建造で、本町だけは山車（だし）と呼んでいます。中央の猿田彦命の像は神の先導役で、昔、各町内の屋台が連なって巡行していたころ、本町の屋台はその先導役でした。関川の河川改修によりその大半を失った旧新橋区にも舟形の屋台がありましたが、春日新田に譲ったといいます。

横町の屋台は現在でも大神宮に保管されていますが、両町内の人口の減少に伴い、昭和47年、本町と横町の青年会が合併して、本町の屋台に参加することになりました。

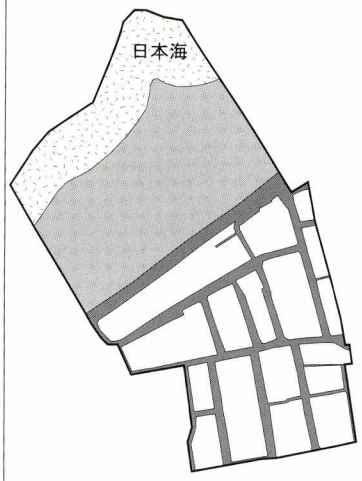
横町は本町と同様に商店で構成され、中央商店街と駅前商店街の中間に位置し、いろんな商店がありました。かつては今町に入る玄関口となるまちで、通称十軒町あるいは、後に国体道路と呼ばれる通りが昔の街道でした。この通りと真行寺の前の通りとの交差点のあたりにりに関所が置かれました。



なとりや

木版の版木ですから文字が反対ですが、「直江津新町　なとりや履物店」と書いてあります。もともと下駄屋のナトリヤさんは、昭和25年まで下駄を作っていたそうです。写真の版木は90年ほど前のものだそうです。

福永町
ふくながちょう





福永町の屋台

福永神社を由来とする福永町は旧新坂井区、新本砂山区、新横区からなり、昔は所帯数も多く、3つの町それぞれに屋台がありました。

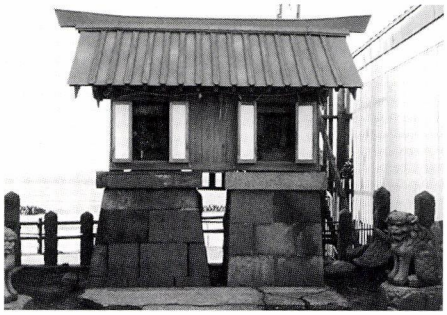
現在、福永町で使われているものは新本砂山区のもので、昭和4年に造られたもの。建造当初は白木造りで、2年後の昭和6年に総漆に仕立てました。昭和53年に新横区の屋台の舟を取り付け、八坂丸になりました。

また、新横区の上モノは東雲町に引き取られたと言われていますが、今回、旧本砂山区の屋台も東雲町に譲ったという話もあり、ご存知の方はお教えください。

町名の由来となった福永神社は、江戸時代、高田の封建的な支配下に置かれていた今町（直江津）が海産物の販売権を主張して、四十物出入（あいものでいり）の犠牲となった福永十三郎の死を悼んで建てられたもので、ここに福永神社が建てられたのは、この辺りに漁師や生魚を商いとした人が多く住んでいたことが理由だと考えられます。

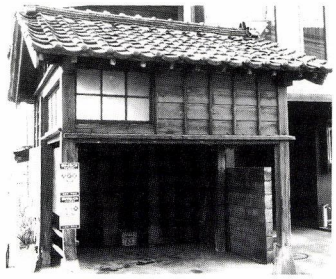
また旧町名で分るように、かつては砂丘で、江戸時代後半になって成立したまちで、ここまでが今町の西側の範囲だったと思われます。また、高台に立つこのまちの、いたる所から海を望むことができます。間近に見る海とは違った海の風景があるのも、この町内の魅力のひとつでしょう。

●まちのめじるし●


恵比寿稲荷

恵比寿稲荷とも大黒様とも言われる豊漁の神様。新坂井区と沖見町の坂井区はもともと一つのまちだったので、この神社の祭事は沖見町と福永町の両町内で行われています。


福永神社


井戸小屋

小屋は当時のままですが、現在は井戸を埋めてごみ置き場として使用しています。昔は各町内に2，3個の井戸があり、どこもこのような小屋があったといわれます。直江津の地下水は塩分が多少混じるため、水道が普及した現在では井戸として残るところは全くありません。現在このように小屋だけでも残っているのは珍しい風景です。

直江津では井戸のほか、荒川の水も生活用水として使っており、雨が降った後などは、荒川橋または永代橋の真中からつるべを下げて、水（雨が降った後の水は“うたれ水”と言って格別に美味しいのだとか）を汲んでいました。

目見る（みるめ）

直江津ゆかりの兄弟画家

上越には父子で画業を営んだ画家として倉石米山・乾山父子や川上松岳・松涛（岩の原葡萄園創設者川上善兵衛の父）父子が挙げられますが、兄弟で画業を営んだ画家は稀です。石塚仙堂・仙田菱畝が恐らく上越地域で挙げられる唯一の兄弟画家ではないでしょうか。平成九年に故郷の安塚町で二人の回顧展が開催されたのは記憶に新しいと思います。

石塚仙堂は明治二十三年、頸城郡小黒村大原（現在の安塚町小黒）の仙田美代蔵・トキの三男として生まれ、本名を仙田忠治といいました。三歳下の弟、万知（後の菱畝）とともに幼少の頃から画に親しみ、忠治は三歳の頃から万知に画の手ほどきをしていたといいます。明治四十一年、高田師範学校（後の新潟大学教育学部高田分校）に入学し、密かに画道を志す一方で柔道やマラソンに励みましたが、肋膜炎を患ったのを機に学校を中退し、画道を志して上京することとなりました。

上京後、十年間は川合玉堂門下で画業精進の後、大正八年、師の許しを得て橋本関雪に師事しました。自身は師のことを「関雪先生は天才中の天才で、その芸風の高いことで東洋画の最高峰とする牧渓に比せられている。不精石塚仙堂宿縁の深きに恵まれて師弟の契りを与えられ、先生の終焉までその高風感化に浴したことを終生の誇りとするものである」と述べており、師に対する心酔ぶりをうかがうことができます。

大正十四年、三十五歳の時、仙田家から直江津の石塚ナカの養子に入り、「石塚仙堂」と号するようになりました。その翌年には、古川長四郎の娘ノブと結婚、より一層画業へ励み、昭和十一年、改組第一回帝展に《碓氷の冬》が入選、その後も精力的に制作活動を展開しました。

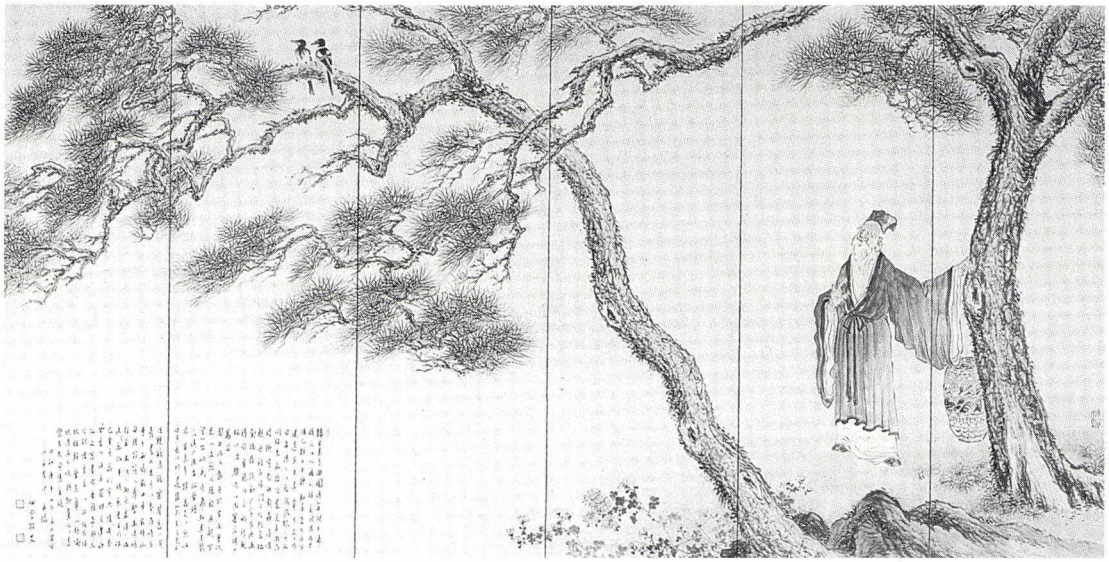
戦時中は一時水原町に疎開し、その後糸魚川市へ移住しますが、昭和二十六年からは直江津に定住し、八十二歳で没するまで終生ここで筆を執りました。

仙堂は山水画、花鳥画、人物画、動物画など幅広く作画活動を行い、山水画は玉堂風に、人物画や動物画は関雪風に描きました。その中でも特に「壺図」を得意としており、多くの作品が残されています。

一方、仙田菱畝は十四歳で荒木十畝に師事し、十九歳で日本画会展出品の《菊之図》が入選、宮内省の御用品として納められました。またその翌年も連続入選するなど、早くも頭角を現しました。

大正九年からは展覧会出品を中止し、約十一年にわたり日本各地や朝鮮、中国などを漫遊し、写生活動に明け暮れる日々を過ごしました。また、昭和五年からは小室翠雲に師事し、日本南画院を中心に活動を行い、数多くの作品が入選、その実力を発揮しました。

戦後、菱畝は新津市に移住し、五年間ほどこの地で制作活動を行いましたが、昭和二十七年脳溢血で倒れてからは右手





上　寿老に松図（昭和五年）　石塚仙堂　六曲一雙（個人蔵）
下　花鳥図（昭和六年）　仙田菱畝　六曲一雙（個人蔵）

が使えなくなり、昭和四十四年、七十五歳の生涯を終えるまで左手で制作活動を行ったといいます。

菱畝は花鳥画を得意としました。長年に渡る確かな写生力に裏付けされた中に伝統的な南画技法を用いて制作された作品からは、文人画風の素朴さの中にも風雅で気品が溢れており、自在な筆遣いで自然などの対象物を生き生きと描き出しています。しかし、このことは菱畝だけでなく、兄仙堂にも共通の画風を見出すことが出来ます。

今回挿図に掲載した作品は、石塚仙堂《寿老に松図》、仙田菱畝《花鳥図》の各六曲一雙の屏風ですが、兄弟合作として制作された作品であり、まさに一雙の屏風画に二人の「競演」をみることができます。それぞれ得意とする画題を選択し、端麗な色彩を伴いながら二つの屏風が呼応するように一作品として融合され、兄弟ともに切磋琢磨している姿が感じられます。作品の出来は言うに及ばず、一つの作品の中に互いを高め合う姿には感動を覚えます。

また、昭和四十三年には仙堂と菱畝は五智国分寺境内に「筆塚」を建立しており、そこを訪れることで「直江津ゆかり兄弟画家」の業績を偲ぶことができます。

笹川修一（ささがわしゅういち）
上越市立総合博物館学芸員

読者から

冬号の特集記事に触発されて、思いがけず桑取・西横山の小正月行事の一部を体感してきた。十五日早暁の「禊（みそぎ）」は見られなかったが、「焼き草集め」「嫁祝い」で子どもたちの唄う歌声に、穏やかな時の流れを感じた。「オーマラ」で迎えるフィナーレは、濱谷浩の写真の光景、松明が闇に踊る鮮烈な印象が眼前で繰り広げられ、喚声と興奮で最高潮に達し、この行事は幕を閉じる。

自然に対する畏れと感謝、その先に居る神との深い交流、子孫繁栄の切なる願いなどが、年月を経て伝承の形となった小正月行事。生活実感とはかけ離れた文化財となってしまった行事が、戸数僅か二十戸足らずの集落の人々にお荷物とならず、自ら楽しむ行事として、この先ずっと続けられることを祈りながら、新雪の美しい桑取川岸を下ったのでした。（新光町・米山）

＊

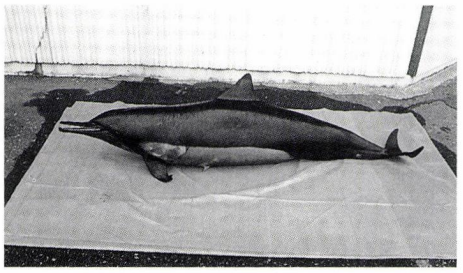
冬号の特集に誘われて、主人と初めて桑取の小正月行事を見に行きました。

〈編集室から〉でも書いてあるように、桑取など、親戚でもあればいざ知らず、わざわざ行くなどという所ではありませんでした。

大の大人が、まるで遊ぶように松明で叩き合うのは、とても面白く、そして、本当に子供が多いのにも驚きました。

全部を見ることはできませんでしたが、大変な行事だと思いました。また別の面で、一月十五日を成人の日でなくてもいいから、小正月の祝日として復活できたらいいのにと思いました。

日本海初記録　ハシナガイルカの漂着



種　　名　ハシナガイルカ
学　　名　Stenella Iongirostris
英　　名　Spinner Dolphin
大 き さ　体長　181 ㎝
　　体重　50 ㎏
漂 着 日　2003 年 2 月 24 日
漂着場所　能生町木浦
発 見 者　神谷　茂さん（能生町）

熱帯から亜熱帯域にすむ外洋性のイルカです。日本では和歌山県以南に出現しますが、目撃例は多くありません。

体長は 1.5 ～ 2.2m。体重は 1.9m で 60 ㎏ほどです。

通常数十から千頭をこえる群れを作り生活をしています。英名の Spinner（スピナー）は、このイルカが時々海面から高くジャンプして 1 ～ 2 回きりもみ状に回転（スピニング）することから付けられています。

（資料・上越市立水族博物館）

■編集室から■

大変辛口の投稿をいただいて、来るもの拒まずという姿勢で、賛否両論覚悟の上で載せさせていただいた。匿名希望でも、できれば本誌には実名をご連絡下さい。

上越市という行政のひとくくりだけではなく、あえて、高田にとって直江津とは、直江津にとって高田とは、ということをもう一度考えてみないと、毎日のように新聞紙上をにぎわしている「平成の大合併」が単なる大きければいいという、投稿の方が指摘したようなことになるのではないか。

そのようなことも含めて、特集のなかから、まちのアイデンティティーを見てほしい。

特集を読んでいて気付いたのは、海のまちである直江津に海産物の加工業が何故少ないのか、という理由である。何ごとも歴史を背負っていることが理解できる。

〈編集室から〉の筆者は、カラスがカップラーメンのカップをくわえて遊んでいるのを見ているので、嫌いではないのだが、山麓線のカラスはちょっと不気味。

都市環境の指標のカラスとどう付き合っていけばいいのか。

浜下駄は、柏崎市立博物館の渡邉氏にご教示をいただいた。

読者から

それから、見せてもらうほうも邪魔にならないように気をつけて、観光化しないでほしいと思いました。（中央五・主婦）

＊

冬号の特集「直江津・五智十二景」よりも、秋号の「五智八勝」のほうがおもしろかった。作者の力量の問題だと思うが、かつて、このような景観を選んだというのは興味深い。

高田の住人としては、高田〇〇景というのがあったら紹介してほしい。また、浄興寺の屋根が柿葺きで復元されたという記事は、高田にもこんな雑誌があるといいのにと思ったが、「直江の津」というタイトルにこだわらず、貴誌が肩代わりしてくれればと思う。（南城の住人）

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五（五四三）九七一五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

第三巻二号（夏号）
六月二十日　発行予定

年間定期購読（四冊一九二〇円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊「直江の津」春号
第三巻一号　通巻九号
発行日／平成十五年三月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津
— 中世都市・越後府中・直江の津 —　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ　水族館に何を見るか　中村幸弘
フリースペース　石瘦庵主茶人宗次という人　平丸誠

2001年6月　2号　夏号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ
— 直江津の産業史 —　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」
—囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町家の人形さま巡り
知の楽しみ　妙高山　現在・過去・未来　早津賢司
フリースペース　茶室見学ノート　石瘦庵　佐藤昭夫
講演　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース　こんなまちがあった1　八木登美男
講演　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子

2001年12月　4号　冬号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔
ミニ特集　直江津路上観察
知の楽しみ　世界一の山脈 関田山脈　南木均
フリースペース　こんなまちがあった2　八木登美男

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン
ミニ特集　同じまちなのに知らない“もの”ばかり？
知の楽しみ　能生白山神社　春の大祭と舞楽　土田孝雄
フリースペース　「とんちん館」感傷旅行　濱田研吾

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
2　報道のなかの祇園祭
ミニ特集　春日山で遊ぼう
知の楽しみ　雪国の固有と呼ばれる植物　長谷川康雄
フリースペース　山を楽しもう　永島賢司
講演　信頼回復なくして景気回復なし　割田満

2002年9月　7号　秋号
特集　1　直江津五智遊覧の旅
2　直江津の再生　江塚友之
ミニ特集　秋は寺町巡り
知の楽しみ　岩の原ワインの楽しみ　萩原健一
フリースペース　1　すみれが大好きだったダン道子先生　星野達雄
2　相馬御風と中山晋平になる上越の新民謡　村山和夫
講演　「地球」という館　渡邉　隆

2002年12月　8号　冬号
特集　1　西横山小正月行事
2　直江津・五智十二景
ミニ特集　この秋直江津のまちでやったこと
知の楽しみ　健康老化は人類の夢？　鍋島陽一
フリースペース　直江津の音楽文化 — その1　中井ソノ先生の思い出　箕輪響
見る目　文安三年銘府中八幡宮鰐口
わたしの直江津　直江津恐怖体験　藤田英明
読書びと　『清陰星雨』中井久夫著

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊 直江の津



発行／平成十五年三月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)